

## 江戸の遊女はなぜ日記を書くのか

### ～性差〔ジェンダー〕の歴史から現代社会を考える～

日時：令和3年6月19日(日) 13:30～15:30

会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」 大会議室



講師 よこやま ゆりこ 横山百合子 さん（国立歴史民族博物館名誉教授）

#### 《講師プロフィール》

1956年生まれ。神奈川県立高校で社会科教諭として勤務後、東大大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。千葉経済大学経済学部教授などを経て、2021年4月より、国立歴史民俗博物館名誉教授。専攻は日本近世史、ジェンダー史。

\*\*\*\*\*

#### 【ジェンダーの歴史を紐解く】

国立歴史民俗博物館は何かを借りてきて展示するのではなく、大学が共同で研究した成果を発表する場としています。

昨年（2020年）は、「日本列島社会の歴史とジェンダー」という3年間の共同研究をもとに『性差〔ジェンダー〕の日本史』という展示を行いました。

このプロジェクトを進めるにあたり、私は目に見えないジェンダーについて、どのように皆さんに見ていただこうかと考えました。

まず、女だったら、男だったらこういうふうに行動しなさいという、男女の社会的な区別が生まれたのはいつからなのか、人類始まって以来あったのかを見てみました。すると、男女を区別する制度は、海外同様、日本の場合も、明らかに人間がつくってきたものということがわかりました。その中で人々がどのように生きてきたのか、女性たちの声に耳を澄まし、想像ができるような展示を心がけました。具体的には、仕事と暮らし、政治空間でそして性の問題について、男性と女性がどうであったか、歴史を追った内容

にしました。

## 【遊女の登場】

日本の博物館は、文字の資料が古い時代から残っていて長い期間の歴史がよく分かります。よく売春は最古の職業だと言われることがありますが、古代には性の売買という概念そのものがなかったのではないかと思います。なぜかという、当時の結婚は非常に流動的で、一夫一婦制のような強いつながりではなかったからです。

10世紀前頃からは、結婚による夫婦の関係性が強まっていくとともに、女性の社会的立場が段々と弱くなっていったことから、男性が女性の性を買うという「買売春」が生まれました。そして、中世になると、娼婦を意味する「遊女」という言葉が登場します。その頃の「遊女」は自営業者で、何より芸能の能力がないとなれませんでした。芸能をし、場合によっては性も売り、自分の家の場合には宿屋もやる。ホテル兼エンターテイメント兼売春みたいな遊女の家を、母から娘へと代々譲っていたのです。

しかし、戦国時代になると遊女の家はほとんど資料に出てこなくなり、男性の経営者が日本のあちこちから遊女を買い集め売春させる遊女屋に代わります。江戸時代になると、幕府は参勤交代で単身赴任の武士を全国から江戸や大阪のような巨大な城下町に集めました。そして女性の性を買える場所を公認し、遊郭をつくったのです。江戸時代、人身売買は原則禁止でしたが、年季を決めて遊女奉公の名目のもと女性たちは売買されました。そこへ連れてこられた女性たちというのは、本当に厳しい状況にあったと思います。

江戸では、幕府が遊女屋に対して、遊郭内で営業する権利を認め、非合法の遊女を取り締まり吉原の遊女を商売道具にすることを認めました。町奉行所の年収も多いときには4分の1弱は遊郭からの上納金で、江戸の行政も遊郭に依拠していました。

実は吉原というのはものすごく火事が多いところでした。1800年から幕府が倒れるまでに20回以上の火事が吉原で起きています。遊女の付け火（放火）によるものもあり、2年半か3年に1回火事が起きている、相当激しい社会です。

なぜ遊女たちは付け火をしたのか、実際の遊女はどういう暮らしをして、どういう思いを持っていたのか長いこと分からなかったのですが、東北大学の附属図書館にある『梅本記 参』という資料に、付け火をした遊女たちの日常の食事や苦しい生活を書き綴った日記の写しや裁判の調書がありました。

付け火の動機「小雛申し口」（調書）より抜粋

「兩度食べさせ候食事も世間並み二相外れ、事替り候品食べさせ、その上昼夜となく手荒の責二逢い、実に以て何共申し上べきの様これなく、いまだ書入（年季）四ヶ年もこれあり、とても身体取続き出来申さず、所詮此姿にて責め殺され候より、火を付け、皆憤を晴し候うえ、御法通の御沙汰を蒙り候積りを以て、当三月廿一日頃と覚え、傍輩拾六人兼々申し合わせ置き候処（中略）拾六人一同申し誓い置き候義二付、今更遁れ申すべきなどと申心底、毛頭御座なく候」（東北大学附属図書館蔵「梅本記 参」より）

次の文章は、わかりやすい現代語にしたものです

「2回ある食事も、中身はとんでもない食事を食べさせ、夜昼なく手荒い責めにあい、それでも、もう少しで年季明けだと思えば我慢するけれど、年季の奉公は4カ年もある。これでは体ももたない、所詮どうせこんな状態で、この姿で責め殺されるよりは火

を付けて皆で怒りを晴らしたい、覚悟を決めて、3月21日頃、16人で申し合わせ、火付けをした。死刑かもしれない、島流しかもしれないけれど、法の裁きを受ける覚悟だ。この新吉原に閉じ込められてここで暮らすのは耐えられない。もう命をなくしてもこのひどい梅本屋という主人を告発したい。」

遊女たちが「自分たちは間違っていない。梅本屋が不正なんだということを明らかにしたい、その結果、自分たちが火あぶり、島流しになってもいい」と腹をくくって付け火という行為に出たわけです。

### 【書くことの意味】

遊女たちの「日記」は、話し言葉によって自己を取り巻く世界を書き写していった記録です。人間は心に非常に強く刻まれたこと、辛いことを吐き出さずにはいられません。今なら、例えばSNSに匿名で書くこともできます。一番いいのは信頼できる人に話すことです。しかし、遊女には聞いてくれる人がいたでしょうか。常に競争、ライバルの世界に置かれています。聞いてくれる親友がいたとしても、もしその人が裏切ったら、旦那に言いつけたら、自分はもう本当に破綻です。そう思うと、なかなか話せない。遊女の生活というのは、そういうものだったんだろうと思います。それならばどうするかというときに、「自分の心の中の溢れる思いを書かずにはいられない」、そういう気持ちが湧いてくるのではないのでしょうか。書くことでもう一人の自分がそれを後になってから読む。そうすると、自分を客観視することもできたでしょう。

### 【歴史から何が学べるか】

江戸の社会は買売春を公的に承認し、娼婦の数もたいへん多かったわけです。近代になってもそのことを「これでいいのか」と振り返ることなく、歴史が続いてきています。そのため、現代の日本で性を買うということのハードルが、ある意味非常に低いところがあると思います。

江戸時代は、もちろん文化を生んだという側面もありますが、そういう歴史的背景があることを私たちはもう一度振り返らなければいけないという問題があります。また、親のために身を売り、もう遊郭で生きると決めていた女性が、自分の人生を思ったとき、自分はこれからどう生きていくのかと本当に考えたと思います。人生はいろいろな難しさにぶつかります。その時に自分を見つめてどうすべきかということを考えて行動に移すことは大変なことだと思います。でも、これしかないと思ったときに一步を踏み出す、その決意、決断、そういう人間としての強さみたいなもの、この激しい抑圧の中でも真剣に生きた人たちがいるということを知ることができて、歴史を勉強してきてよかったと思いました。

人間は暮らす環境は違うし、考え方も違うけれど、そこに生きた人たちの思いや歴史を知ることによって、私たちは学んだり、勇気づけられることがあるのではないかと思います。

